
異世界大掃除?

恋夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界大掃除？

【Nコード】

N7313W

【作者名】

恋夢

【あらすじ】

シンデレラの世界に飛ばされた私ことソーネは、毎日元気に暮らしています。…いやまあ、シンデレラが豪快とか隊長が不潔とかムノイさんが熱血とか王子様が粘着質とか第二王子がツンデレとかいろいろと不満がないわけじゃないんですけど…うんまあ、楽しいからいいよね。そんな、清潔少女の爽やか（なのか？）異世界とつづぶ物語。第二部突入です、イメージ的には大奥を目指します（無理）。コメディ100%シリアス0%でお送りします。

024：呼ばれて飛び出してお掃除し隊！（前書き）

異世界大掃除？を見てからの方が分かりやすいと思います。
でも一応登場人物紹介！

024：呼ばれて飛び出してお掃除し隊！

これは登場人物紹介です

#爽田さわだ絵衣えい【】：掃除大好き十八歳。日本だと女子高校生。将来の夢は掃除婦。極度の綺麗好き。潔癖性とも言う。顔立ちは何もない平凡で地味な印象。綺麗な黒髪で肩までのミディアムはじめて会う人には大人しい・地味というような印象を与えるが実際はかなりの変人。ゴキブリが大嫌い。異世界では「ソーネ」という愛称で呼ばれている。トリップした最初の頃は隊長の家で住み込み掃除婦をやっていた。一人称は私。

#ダーティ・アレスト【】：王宮騎士団隊長二十三歳。とんでもない不潔男。でも意外にイケメン（と言っても準イケメンというレベル）。臭い。服がぼろい、デザインが古い、色が汚い、ぶかぶか。将来の夢は特になし。しいて言うならソーネと両思いになりたいとか。髪に埃が被っていてよく分からないが茶髪で長髪。瞳は水色。肌は白いが垢まみれ。どこからどう見ても不潔な人。屋敷は既にゴミの城状態。ソーネからは隊長と呼ばれている。ソーネのことが好き。要するにロリコン大魔神。一人称は私。

#アッシュ・レイシャンジ【】：上級貴族レイシャンジ家の娘十四歳。幼い頃に母親を亡くし、今は父親と継母、そして姉達と暮らしている。かなり可愛い顔。それなのに、性格は豪快で、「ガハハハハッ」と高らかに笑う。銀の長髪をツインテールにしている。エメルドグリーンの瞳。これらは全て父譲り。洋服はいつも黒くて古いワンピースにぼろいエプロンを付けている。将来の夢は竜騎士ムノイの弟子。自ら掃除をやったり人助けをしたりする変わり者。愛称はシンデレラ。だが姉や継母とは割と仲がいい。でも、姉たち

がシンデレラにべったりなのはたまにうざったい。愛用武器は拳。
一人称はあたし。

#ムノイ「ミズレル」：王宮竜騎士団隊長二十三歳。見た目爽やか
中身熱血の面倒くさい奴。やる気のオーラが全身からみなぎっている。
顔立ちはそこそ良い。髪色は明るいオレンジっぽい赤。瞳も髪と同色。
体つきは細身で聴診。顔立ちはそこそ良いのに、熱血過ぎて気持ち悪くなっている。
ダーティとは自称親友。ソーネのことが好き。なのかもしれない。
シンデレラの師匠。竜騎士なので、一応毎日竜と共に行動している。
だが、竜はムノイ以外にはなつかないので、滅多に姿を現さない。
愛用武器は竜。？一人称は俺。

#リグト「ウォールナト」：ウォールナト王国の第一王子二十歳。
軽くて明るく社交的。愛人は何十人、愛を交わした女性は3桁の位までに上がる程。
究極の間接無し。王宮に後宮ハレムをつくるのが夢。無駄に美形。
鼻筋通った顔に、鋭い瞳。髪は何故かピンク。瞳は紫。性格とのギャップが激しい。
自分勝手に阿呆で間抜けな王子様。トラブルを引き寄せる特性を持つ。
弱虫で臆病。自分自身で戦うということを知らない。
すぐに愛人をつくらうとするのが悪い癖。ソーネを少し恐れている。？一人称は僕。

#リダント「ブルリウス」：神様っぽい妖精なんちゃら歳。阿呆阿呆阿呆。
これしか言いようがない。姿は人型だが、中身が本当に人なのかは不明。
一応妖精だとか言っている。自分の所有世界をいくつか持っていて、
その世界では一応神様という存在になっている。愛称はリプル。
ソーネに金の雑巾を渡した。詳しくは「神様に恋愛的休日。」をどうぞ（笑）一人称はおいら

これは登場人物紹介です

024：呼ばれて飛び出してお掃除し隊！（後書き）

はい、初めまして…？恋夢です。

異世界大掃除第二部突入！！ということで終始ニヤニヤしている恋夢です

いやーこんなのが続いていること自体おかしいんですけど；

えっと最初に言っておきますが、更新は毎週金曜日。

時間帯は決めてません。

諸事情で予告無しに変更になる場合もあります。

あと、中学二年生なので文章も雑、内容は軽い、テスト期間はパソコンに向かえないという悲劇を背負っています。

受験生に昇進（？）したら更にパソコンに向かえなくなりますが

…そこは…一ヶ月に一度のペースで頑張りたい…と……思っています…；；；

ま、そういうことで頑張ります！！

025：波瀾万丈メイド参上（前書き）

タイトル意味分らない……。
ていうか波瀾万丈って……一体……。

025：波瀾万丈メイド参上

「それで、貴方がレイ＝サラファさんね」

「違います」

「あら？そうだったかしら…まあ、いいわ。それで、なに？メイド志望？」

「違います。掃除婦志望です！」

「なるほど、メイドね。ちょうど良かったわ、確か…食堂の手伝いが一人辞めちゃって、空きがあった気がする」

「あの…そうじふ、」

「それで、いつからエリ＝アルファさんは仕事に來られるのかしら」
「…ソーネと呼んでください。今からでも仕事します」

この世界の人に私の名前は通じないらしい。

そんなことを深く実感した、さわたえい爽田絵衣十八歳です。

ふいふ…。

疲れたよ、ホント。

だって、あの面接の人、私の掃除婦への夢を全然理解してくれないんだもん。

人に自分の夢を馬鹿にされると、凄く嫌だよね、うん。

「ま、でも…」

仕事が決まってよかった。

あるときシンデレラのお姉さんに会ってなかったら、今頃どうなっていたことやら…。

路頭に迷っていただろうな、私。

そういえば、あの面接の人、名前…マリアさんだっけ？

マリアさんは、メイドの総指揮官だとかそうでないとか…。

というか私は別にメイドになりたかった訳じゃないのに。

掃除婦になりたかったのに。

それが駄目なら掃除専用メイドになりたかったのに。

「メイドさん…ってことは、」

『いらつしやいませご主人様』とか言うのかな。

嫌だなーそれは。

あ、っていうか、メイド服を着るのか！？

絶対似合わない…嫌だ……。

こんなことになるなら、メイドじゃなくて聖騎士にでも立候補しておけばよかった。

…でも聖騎士になったら隊長と出くわして気まずい思いを味わうことになるしな。

私は一体どうすればいいんだろう。

悶々と私が考えていると、後ろから声がかかった。

「ちょっと、ソーネさん！」

「え…？あ、なんだー、マリアさんじゃないですかー！」

さっき出会ったばかりのマリアさんのご登場である。

おやまあ、ご丁寧に走ってきてくれたようで。

悪いなーなんて重いながらにんまりと微笑むと、マリアさんの顔がサツと青ざめた。

……しゅっしゅれいなー！

「貴方ねえ……！一応、試験があるから着いてきなさいって言ったじやありませんか！なのにどうして、どうしていきなり私の逆方向へと歩き出すの！？ねえっソーネさんは私のことが嫌いなの！？」

「ちちち違いますーっ」

ただ貴方の話を聞いてなかっただけです！

ものすごい勢いで土下座したくなる今日この頃。

っていうかマリアさん被害妄想激しすぎる気がします！

ある意味怖いです！

何かトラウマでもあるのかこの人。

「……もういいわ。いいから、ちゃんと着いてきなさい」

「はい！」

マリアさんが、くるつと踵を返して歩き出す。

う、後ろ姿が……大人の女の人って感じがする……。

『背中では語る女、マリア』みたいな！？

「ソーネさんっ着いてきてるの！？」

「います！少しは信じてください！」

目の前で呆然としているマリアさん。

目の前のピカピカになった清潔な倉庫。

そして、ふんぞり返っているこの私。

…えっへん。

マリアさんに、試験の科目は自分で決めていいと言われたので、迷わず掃除を選んだ大人げないソーネです。

おかげで、つい三十分前までは小汚かった倉庫が、今じゃぴっぴかのきつらきら！

これにはさすがのマリアさんも驚いたよう。

「そ、…そーね、さん……」

「はい！合格ですか？合格ですか？」

「…貴方、何者……？」

え！？

…人間、だよ。

いや、この世界だと私は「異世界人」…？

…それ以前に宇宙人ですと名乗った方がいいのか……？

「……私は、…しがない掃除婦を目指すちょっと綺麗好きな女の子です」

「…合格よ！…もー、勝手にどこでも掃除しちゃって！」

「あざーっす！……！」

「え？アジャ―シュ？何なのその言葉」

そうか、あざーすは日本でしか通じないのか。

さすが異世界。

今更ながらに、ここは異世界なんだなあと感動した私でありました。

隊長へ。

はいけい（もじをかくのははじめてなので、きたなくてすいませ
ん）

おげんきでしゅか、隊長。

わたしはげんきです。

おしろのめいどのしけんにごうかくしました。

こんしゅうは隊長のいえにいけなさそうなのでてがみをおくりま
した。

このせかいのめじはめんどつくさいですね。

まだじょうずにかけません。

まりあさんにとつくん？をしてもらっています。

こあいです。

あ、まりあさんっていうのは、めいどさんのぼすです。

おにです。

きょうきでし。

せなかでかたるおんなです。

そというわけでそーねはきょうもげんきです。

隊長、していますか。

めいどのしよくじはいちにちにかいなんですつて。

しんじやいそうなので、ばかおーじのところにいつてしよくりよ
うをうばってきます。

にほんじんはいちにちしやんしよくたべなきやだめ、ぜったい！
そというわけでそーねはきょうもげんきです。

らいしゅうはたいちようのいえにいけるとおもうので。

すこしはけんこうなせいかつをしてくださいね。

そーねより。

つき。

わたしあいようのふらいばぬを隊長のやしきからおしろにもって
きてくれるとうれしいです。

025：波瀾万丈メイド参上（後書き）

どうしても今日中に投稿したかったんです…初投稿が登場人物紹介だけなんて虚しすぎるじゃありませんか！！

…あ、隊長への手紙、読みにくくてすいません。読まなくてもいいです（え）。

あと文章が所々おかしいのは作者のせいではなくソーネちゃんのせいですから！

ソーネちゃんのせいですから！（大事なことなので二回言う）あ、でも誤字脱字ありましたら言うてください

026：カルシウム不足の先輩（前書き）

皆様、台風は大丈夫ですか？

私は無事です。

その日の学校はお休みになりましたけど。

026：カルシウム不足の先輩

「ソーネっ、ソーネっ！！さっさと起きなっ、朝よ！」

メイドの朝は早い。

目をこすりながら飛び起きた私に、いきなり罵声が降ってきます。

「全く、これだから新入りは困る。ソーネ、アンタすっごく遅刻」

凄く遅刻って、なんか変な日本語…じゃなくて、異世界語。

私は、ルームメイトのなんちゃらリーノさんに起こして貰っているらしい。

住み込みのメイドとは言えども、一人一部屋貰える訳じゃない。

四人一部屋という制度らしいが、私が入れてもらっている部屋は、私を入れて三人である。

一人はメイドのボスのマリアさん。

で、もう一人はメイドの次期ボスと噂されているらしい、なんちゃらリーノさん。

この人は早口なので、名前を聞き取れなかったのだ。

「そうなんですかあ…」

「そうだってば！さっさと着替えて、迷惑！」

「はい…。えっと、何に着替えましょうか…？」

「はあ！？ちよっと、アンタって信じらんない！メイド服を着るに決まってるでしょ、早くこれ着てよね！」

なるほど…。

やはりメイド服を着るのか。
出来ればフリフリらびゅりーなものは避けたいな。

なんちゃらリーノさんが私に突き出したのは、至ってシンプルな
紺色のメイド服。

何となくガッツポーズの私。

ただ、メイド服に添えられてあるエプロンに…少しだけフリルが
ついているのが少し気になる。

いや、ほんのちょこつとだけどき、でも気になるよね！？
裾のところにちよつと着いてるだけでも邪魔だし？

…切っちゃおうか。

「ソーネ！聞いている！？」

「聞いてません！」

「は！？」

しまった、つい条件反射で…。

慌てて口をつぐんだけれど、時既に遅し。

なんちゃらリーノさんの後ろに、怒りの炎が見える……。

「そおおおおねええ！アンタ、新人のくせに…っ、」

「ごごごめんなさいすいませんでしたリーノさん！…」

なんちゃらリーノさんの口がぽかんと開く。

……更にしまったあああ！

もしかしてリーノって名前じゃない？

嘘だろおお…。

「……ちよつと、あり得ない！あたしの名前覚えてないの！？ダ
ディよ、だ・で・い！どこがリーノよ！？」

だ、だだだ、だでい…。

頭の中で何度も繰り返す。

でも、その名前はしっくり来なかった。

…いきなりダディって言われてもな…。

「いきなりじゃないわよ！昨日ちゃんと自己紹介したわ！」

およ！？

何故私の心の声が聞こえている！？

「駄々漏れよー！心の声って言うくらいなら、ちゃんと聞こえない
ように呟きなさい！」

いやいやちゃんと心の中で呟いてますって！

私は何も悪くない！

そう思って胸を張ると、ダディさんが一つため息をついた。

「ため息一つにつき幸せ三ついただきまーす」

「はあ！？何言ってるのよソーネ！意味わかんない冗談はやめて、
さっさと着替えなさい！」

意味わかんないだなんて酷い。

この言葉は日本では当たり前だの一文字なのに！

…って私何を言っているんだろうか。

とりあえず落ち着こう、そうしよう。

「じゃあ、私着替えるので…」

「さつさとそうしてちょーだい！こっちは迷惑してんのよ！」

他人の迷惑顧みずってやつですね。

「了解です、ダディさん」

「やっとあたしの名前覚えたのね…」

「イエス・サー！」

「は…？」

あ、何でもないです。

お気になさらず。

…さてと。

今日からメイド！

頑張りますか。

「ソーネさん、それからダディ。遅刻ですわ。何をしていたのかしら？」

「ちよっ、マリア！あたしはただ、ソーネを起こしに行っていただけよー！」

「ごめんなさいマリアさん、遅れちゃいました」

怒り出すダディさんと、素直に謝る私。

マリアさんは、私とダディさんを見比べて、ため息をついた。

…また一つ幸せが逃げましたよー。

「…ソーネさん。貴方は新入りなんだから、遅刻は厳禁のはずよ。」

そしてダディ。貴方、ソーネさんを起こすのにどれだけの時間をかけているのですか！」

マリアさんが静かに怒り、ダディさんがぷーっと頬を膨らませた。
…子供だな。

内心ダディさんをあざ笑っていると、ダディさんにぽかっと頭を叩かれた。

「いつ……たー…！」

「だあれが子供だつてえ、ソーネ」

「だ、ダディさん…どうして私の心の声が聞こえているんですか…！」

「だーから駄々漏れなのよアンタは！」

私とダディさんがぎゃーぎゃー騒いでいると、マリアさんがまた一つため息をついた。

…幸せが…また一つ、消えていく…。

「…もういいわ。二人とも持ち場に行きなさい。ソーネは、私が案内しますわ」

「はい」

「ちょっとマリア！あたしは悪くないんだからね！？分かってるのっ？」

「ええ…分かっていますわ、もちろん」

マリアさんが憂鬱そうにそう言って、ダディさんはまたむきーつと怒って…。

隊長。

私、どうやらホームシックにはかからずに済みそうです。

「ソーネさん、着いていらっしやい」

「はい！」

「ソーネ、アンタしつかり仕事しなさいよ！」

「分かってますよーだ」

あっかんべー、とダディさんに向かって舌を出す。
すると、ダディさんは真っ赤になって怒った。
カルシウム不足ですよ、ダディさん。

026：カルシウム不足の先輩（後書き）

マリアとダディはサブキャラです。

名前は…覚えても覚えなくてもいいと思いますけど……

主要キャラが全然出てこないのは何故だー！ー！

027：厨房という名のゴミ置き場にて

正直、私は、この仕事に就いたことを後悔し始めている。

「ここが、ソーネさんの持ち場ですね。お仕事に精を出してくださいね」

そう言っ、マリアさんは去っていく。

……え。

こんな場所に、私を置いていくつもりですか。ちよつと待つてよ。

ねえ、ここ、厨房じゃないの？

「うーす」

「昼食三百人分の注文来ましたーあ！」

「あああ！？んだとお？」

「三百人なんて出来る訳ねーだろーが！断れ、断れ！」

「で、ですが、この注文は、聖騎士団からの注文なので…断りにくいです」

「なにい？セイキシダン？ああ、あのむさつくるしい連中な。あいつらなら、適当につくったもん食べさせときゃいいだろーよ。その辺のゴミを集めてスープでも作れ！」

「うーす」

……むさ苦しいのはあんた達だろうよ。

狭い厨房に、大男達は何十人も集まって、わいわいがやがやと大鍋を囲んでいる。

しかも、物騒な会話がそこらじゅうを飛び交っているのだ。

「あつれー、おかしいな…私、メイドの仕事をするんじゃないか？
たっけ…？」

それが何で、厨房で大男達に囲まれて仕事をしなければならないのだ。

私が呆然と突っ立っていると、大男の一人と目があつた。

「あれっ…、おめえ、新入りか？」

「はっはい…！エイ〓サワダです、ソーネと呼んでください！」

「ふーん…。じゃ、早速だけど、その辺のゴミ集めてこの鍋に入れてくれる」

「……ごめんなさいマリアさん。」

私、お仕事初日で追い出されそうです。

「……………んな…、」

「ん？どーかしたのか、新入り」

「…っざっけんな…！！」

その場の空気が一気に固まり、厨房のむさ苦しさが若干消えた。

叫んでから後悔する。

でも、もう止められなかった。

「何で騎士団の人達にゴミを食べさせようとするの！？騎士団の人なら何食べてもいいってどーゆーこと！？あのね、あんた達みたいに適当に生きてる人と違って、騎士団の人達は、毎日一生懸命訓練して、働いて、汗水垂らして生きてんのよ！その人達に食べさせる

ものがゴミ！？信じられない！」

そこで一息ついて、私は厨房を見渡した。
みんなが哑然として私を見ている。

「あんた達みたいな奴ら、職人として失格よ！もちろんシェフとしても駄目！シェフなら、手加減なしに本気で料理をつくりなさい！」

掃除婦とシェフ、多少違いはあるものの、心意気は一緒のはず。

お客さんを喜ばせたい。

部屋を綺麗にして、住人の笑顔を見たい。

美味しい料理をつくって、お客の笑顔を見たい。

それなのに、この厨房の奴らは……、ッ！

「お、おい新入り、てめ、口答えしていいと思ってんのか！？」

「ええ、いいんじゃないですか！？あんた達くらいになら、いつでも口答えしちゃいますよーっだ。だって絶対私の方が、精一杯生きてますもん！あんた達に指図して生きるくらいなら、職なしでフラフラしてる方がまだマシだわ！」

大男の顔が羞恥で赤く染まる。

おうおうおう、今更自分の行いを恥じたって遅いのよばーか！

心の中であっかんべーをして、私はフンツとせせら笑った。

その笑いに反応してか、大男のこめかみがぴくりと動く。

……あ…なんか、ヤバあい雰囲気…。

じり、と私が一步後ずさる。

それを見た大男が大腿で一步私に近づいた。

「てめえ……っ、許せねえ！」

「っちょ……！レディに手え出すとか、サイテー！」

「知るか、てめえみてーな女はレディじゃねー！」

大男が、太い腕を振り上げ、ごっつい拳を私に向かって振り下ろした。

私は瞳をつぶり、衝撃に備える。

がつんつと鈍い音がして、一瞬、目の前が真っ白になった。

…少女漫画だと、この辺でかつこいい王子様が登場しているはずなのに。

現実……というか、異世界ではそう上手くはいかない。

私は無様に殴られて、ものすごい勢いで空中を飛んだ。

「っ……いったー…、」

「もう二三発殴らせろ」

「さ、さいて、え、！」

キッと大男を睨むも、まるで効果なし。

大男が、またも腕を振り上げた。

次の衝撃に備えて、私は堅く拳を握りしめる。

そのとき、私は暖かい何かに包まれた。

「…私のソープに、何をしている」

聞き覚えのある声にはつとなり、私が、暖かい何かを見つめる。
そこには、恐ろしい顔をした隊長が居た。

……誰がいつどこでアンタのものになったと言っただ。

「隊長、いつの間に、」

「……遅くなつてすまなかつたな。会話はほとんど聞いていたのだが……入り口のところで、あいつらに押さえつけられてな」

くいつと顎で、入り口付近に突っ立っている大男達を指す隊長。

……何やってんだ、あの大男達。

「……で、お前達は、我が騎士団の昼食に“ゴミ”を出そうとしたあげくに、ソーネにまで危害を加えた。……これを放っておく訳がないよなあ」

隊長が私をぎゅっと強く抱く。

苦しいです。

苦しいです。

大事なことなので二回言いました。

苦しいです。

「お、おれらは別に……危害を加えようとした訳じゃ……な、なあ、みんな？」

「……くわえただろうが」

私を殴った大男の言葉に、隊長が反応して、周りの温度が氷点下まで下がった。

……怒らせちゃったよ。

馬鹿だな、この男達。

「……ソーネ、」

「はい」

「……つぶしていいか」

大男達より若干小柄……な隊長が、つぶすと言っのとはどうなのか。隊長がつぶすと言ったら本気でつぶすのだらうけど。

「マリアさんに了承を得ないといけませんね」

「まりあ……。……ああ、侍女長か」

……じじよ……。ああ、メイドか。

「そういうことです」

「……それなら問題はない。……なあ、侍女長」

……え？

「ええ、問題はありませんわ。“ぶつつぶして”くださって結構です」

私の視線のその先に、何故かマリアさんが笑顔で立っていた。

028：BBQそれは大家族の一般行事

数秒間時間が固まったような気がしたのは私だけだろうか。

「ま、マリア：お前、何故ここに」

「ソーネさんの様子を見に行きたいと申された聖騎士団隊長殿を案内しに来たのです。そして来てみたらこの有様」

ひつ、と大男が喉をならした。

「さて。貴方達にはどのような処罰を受けて貰いましょうか。え？何でもどんとこい？あら、それなら隊長殿にお任せしようかしら」
「……斬る」

なんて物騒な！

騎士団さんの隊長ということは、隊長も結構強いのだろうし。斬るのは痛そう、だしさ。

「隊長、それにマリアさん。この大男達の処分は、厨房から追い出すことだけでいいんじゃないでしょうか…？」

二人の機嫌を伺いながらそう訪ねると、二人がそろって嫌そうな顔をした。

何でこんなにも息ぴったりなんだこの人達…。

「何故ですか、ソーネさん」

「……何故だ、ソーネ」

「え…っと…、その、あの…私もまだ一発しか殴られていませんし？」

「一発“も”ですわ、ソーネさん」

「……アイツやっぱり許さん。ソーネの体に傷を付けていいのは私だけだというのに」

待つて、隊長、それおかしいから。

怖いから。

私の体は私のものだから！

「あら隊長殿。ソーネさんのことを好いていらっしゃるのね？」

「……まあな」

はい待つて！

何言つてんの隊長！？

認めちゃ駄目、駄目！

私が恥ずかしいから、止まってくださいもう何でもするからさー！

「まあ、素敵だわあ」

「……」

ちょ、隊長得意げに鼻をのばすな。

もういつそマリアさんと隊長がくつついちゃえばいいのに。

「それはお断りしますわ」

「…それは断る」

何で私の心の声が聞こえてるんだらうこの人達。
もう泣きたいよソーネは。

結局、大男達は仕事を辞めさせられるという処分になった。

隊長はしきりに私の殴られた方の頬を気にしていて、マリアさんまでもが、「お仕事休んだ方がいいんじゃないかしら」などと言ってくれた。

いや、別にそこまでしなくてもいいですから。

そんなこんなで大げさすぎる処置を受けた私である。

少し腫れてしまった頬には、どでかいしっぷが貼られた。目立ちすぎだと思う。

「ソーネ、本当に大丈夫か？」

「大丈夫ですって」

「ソーネさん…、ごめんなさいね」

「いえいえ、責任は私にもちよこーっとありますし、ね？」

そして、私に降りかかってきた大きな任務。

それは、聖騎士団さん達のお昼ご飯をつくること、だ。

大男達が居なくなっただけ、あのむさ苦しい厨房はどこへやら…。目の前にあるのはただただ広だけの厨房。

…さて。

今から、何をつくるのか。

手伝ってくれるのは隊長とマリアさん。

と言っても隊長は全くアテにならない。

希望はマリアさんだけだな。

…うーん……今日の献立は……。

「…よし、決めた」

「ソーネさん、何をつくりましょうか」

「今からパンを焼いたりするのは無理そうだし、パスタも面倒くさい。スープ系でもいいけど、それだけじゃ訓練に訓練を重ねてきた男達の腹には足りない。となれば、」

「となれば…?」

「肉、肉、肉。お肉ですよ MARIA さん!」

きよとんとした顔の MARIA さん。

ふふふ。

この技は地球では、大家族でよく使われるのだけれど…こっちの世界ではあまり使われないのかな。

「その名は BBQ。バーベキューとも言います。さあ、お肉と野菜をたんまりと用意してください!」

それから、私と MARIA さんは大いに働いた。

隊長は、私達が慌ただしく動く様子を見ていただけだけど。

「MARIA さんっ、網ってありますか!」

「あみゆ? 何なのかしらそれは」

「え…ないの!?? えっと、じゃあ、大きなフライパン…とか、鉄板とか、」

「そういえば、厨房のどこかにフライパンを平たくのばしたようなものがあつたとか…なんとか…言っていたような気がしますわ」
「それです!」

肉はある。

そしてここには、調味料もある。
野菜もある。

ただ、網がないのだ、この世界には。

畜生、せめてここが大昔の日本だったらな！。

江戸時代くらいなら網あるんじゃないの！？

なんで聖ヨーロッパ風の異世界に来ちゃったんだ私。

「これかしら、ソーネさん！」

「違いますっー、それはボールですっ」

「あら…違うのね、残念ですわ」

マリアさん、意外と家事出来ませんね。

っていつか料理したことないでしょう。

「じゃあ、どれでしょうね…。厨房が広すぎて分かりませんわ」

「あの大男達なら、全ての器具の場所を把握しているのでしょうか」

…私やマリアさんが探すのは無理がありますよね…」

どうしよう。

騎士団の男共の腹を満腹にさせるには、これしか方法がないのに。
肉や野菜を焼く以外は全てセルフサービスだし、焼くだけなら簡単だ。

要は材料を用意しておけばいいだけなのだから。

でも、肝心の鉄板がないと…。

「…おいソーネ」

「何ですか隊長、今忙しいので黙っていてください」

「……聞け。というか見る」

「だから、忙しいって言ってるじゃないですか！」

私がぱつと振り向くと、目の前に黒い何かが。

…あれ、このきらきらとした黒光り…どこかで…どこかで見たことがあるような…？

「て、鉄板…！」

「……だから、見ると言っただろうが」

「あら、これですの、ソーネさんが探していたものは」

「これです、マリアさん、隊長…！ありがとうございます隊長！」

「…別に。私達のために頑張っているソーネを…放ってはおけな」

「よっしゃああこれでBBQが出来るうっー！」

「……人の話を聞け」

028：BBQそれは大家族の一般行事（後書き）

うふ。

うひゅ。

何でこんなことになったんだろう。

設定と全然違うよ！？

設定ではここらで新キャラが…登場してる…はず、なの、にい。

さて、重大発表。

というかおなじみの…、テストです（涙涙涙； ・涙涙涙）

そいうわけで次の更新は恐らく不可能です！

ごめんなさい…！

テスト勉強に集中できるかどうかは分かりませんが出来るだけ頑張ります。

029:フラグがいったぽん(前書き)

フラグをね。

ぽきつとね。

折っちゃうのね？

029：フラグがいつぽん

「はい！それではっ、びーびーきゅー大会を始めたいと思います
！」

うおおおお、という声が城の中庭に木霊した。
す、凄い熱気…っ。

というか汗くさい。

稽古から終わってすぐに来たんだろうな、この人達は。

「では、一列に並んでくださーい！」

ちなみに、指揮をしているのはダディさんである。

マリアさんはその隣で微笑んでいる。

騎士団の男共……じゃなかった、方々は、マリアさんに見惚れ、
ダディさんを恐れているようだ。

さすがダディさん、笑う子も涙の恐ろしい声。

「ソーネ、あんななんか言った？」

「いーえ、別に何でもございませぬ！」

ダディさん怖い。

恐ろしいよ本当。

人の心まで読むなんて……超人ですか。

「ソーネ、あたしに何か隠し事してない？」

「えー……つとおお……、あ、ほら、ダディさん、皆さんがお肉を待っていますよ！」

適当に話をそらして、こそこそと逃げる私。

さてと、私は肉焼き係の方の様子を見に行くか。

肉焼き係こと隊長は、汗をだらだら垂らしながら鉄板の前で仁王立ちをしていた。

……阿呆か。

「たいちよー、何やってるんですかー」

「…肉が焼けるのを待ってい」

「肉というのはひっくり返さなきゃこげます！」

とことん家事について知らない人だな。

せめて肉の焼き方くらい覚えようよ。

っていうか何も、仁王立ちしなくても良かったのに…ねえ？

「隊長、とりあえず肉焼き係の座をを私に譲ってください！」

「……」

「あーっつ、こげてる！肉が！ってゆーか野菜は！？あ、焼き肉のたれがない！」

どたばたと大騒ぎする私を尻目に、隊長が肉待ちの最後尾に並んだ。

…さてと。

それじゃ、戦いに移るとしますか。

「ソーネちゃんっ俺に肉十枚！」

「野菜野菜野菜肉肉肉肉肉肉の組み合わせでお願いしまーす」

「おいこら俺の肉返せよてめえ！」

「先輩に譲れよ、いいだろ、なあ？」

「肉肉肉ううーっ」

もまれている。

今の状況を言葉で表すならずばりそれだ。

もまれている。

むさ苦しく汗くさい男共に、私は、もまれている。

ぎゅんぎゅんに押しつぶされて、臭いと熱気に負けそうだ。

…畜生、ここで負ける訳にはいかないのに。

奴らは、肉を欲してここにやってくるのだ。

それなのに肉を与える役目を授かった人間が、こんなところでへたばってどうする？

「つつ並べって言うてるでしょうが皆さん！一列です一列！今列からはみ出てる奴はさつさと一番後ろに並び直せ！さもなきゃ肉は一枚も渡しませんよ！？」

精一杯の勇気とめいっぱいの本音を詰め込む。

その場の空気が固まり、列からはみ出ていた男達が、素直に列に並び直した。

…これでいい。

私は、一人につき十枚ずつのペースで肉を焼く。

男達はがつがつと、もぎゅもぎゅと、豪快に肉を食べていく。そしてまた並び直すのだ。

…どれだけ食う気だこいつら。

このままだと私まで食いつぶされてしまいそうだな、うん。
そんなことを考えながら、ただひたすらに肉を焼く私。

「肉、くれ」

「言われなくてもあげます…よ…っで、なんだ、たいちよー」

「…無理、するなよ」

「してませんよ。人ノ役ニ立テレバ私ハソレデ良イノデス」

「…棒読みだぞ」

苦笑しながら隊長が私をからかう。

隊長と喋りながらも、私は肉を焼き続けた。

だつてこのままだと、男達が食べるスピードに追いつかないし。
汗が滴り落ちるのも気にせず、とにかく肉を焼くのだ。

それしか私に出来ることはない。

「はい、どーぞ隊長」

「…ん。…ほれ」

え？

隊長が、私から受け取った肉を箸でつまみ、私に差し出している。

「これは、食べるといふことか？

毒味？

「別に毒なんか入れてないんですけど、」

「…ひねくれてないで、さっさと食べ」

はい。

とりあえず素直になつてみようかな。

隊長が差し出している肉をぱくりと食べる。

…うん、毒は入ってない。

それに、味もなかなかじゃないか？

「んーまい！」

「……きちんと食べてから話せ。……じゃあ、私は行く」

「ほーい！」

さて。

今のはフラグに入らない、よね。

…くそーっ、意識しているのは私だけなのだろうか。

「……ッ、」

隊長は、ソーネが見えないところまで来て、はぁとため息をついた。

…心臓がばくばく鳴ってる…。

「…可愛すぎだろ、ソーネ」

……意識しているのは私だけなのだろうか。

029：フラグがいつぽん（後書き）

ただいま帰りました、恋夢です！

うーんと、リハビリ中なので、いまいち筆の感覚が鈍りますが…。
なんとか頑張りましたよえっへん！

0300…シンデレラの恋（前書き）

今回ちょっといい話。

030…シンデレラの恋

誰かが、私を呼んでいる。

誰……誰……？

隊長かな、マリアさんかな、それとも…、

「ソーネ！アンタ、何居眠りしてんのよ！」

「…っうわー…嫌な目覚めー。…ダディさん？」

「何よ、嫌な目覚めって。好きで起こした訳じゃないっての。ほら、さっさと仕事やりな」

なんと。

厨房の監視役に、ダディさんが推薦されてしまったらしいのだ。

そのおかげで、私は毎日こき使われている。

居眠りもできない。

だいたい、ダディさんは人使いが荒いのだ。

「今日は私、何すればいいんですか」

「これ買ってきて。具材。夕食の」

「ほーい」

「返事は“はい”！」

「はーい」

夕食の具材なら、今から買い物に行って、歩いて行くとしても三時間は自由時間がある。

…よし、シンデレラのところに遊びに行こうと。

「ソーネ」

「はい！」

「寄り道するんじゃないわよー！」

「…隣町までひとつ走りで行ってきます」

さーと。

シンデレラの家までひとつ走り行くか。

「いつてきまーす！」

「さっさと帰って来なさいよー」

了解です、四時間後には帰ってきます。

懐かしい街並みが、私を通り過ぎていく。

最初にシンデレラの家にもかつて、それから三時間ぐらい遊んで、市場に寄って帰ればいいよね。

我ながら冴えてる！

そんなことを考えながら全力疾走していると、私の目に、シンデレラの姿が飛び込んだ。できた。

「シンデレラっ、久しぶりー！」

「ん？…おお、ソーネじゃないかっ！ガハハハッ、元気そうだな！」

麗しい姿からは想像もつかない口調で、シンデレラが豪快に言葉を返してくる。

うー、このやりとり、久しぶりだなー。

「元氣元氣、超元氣！」

「チョーゲンキ？まあ、楽しそうで何よりだ！」

「そっちは、何か変わったことある？」

シンデレラに癒されるっていうのも何だけど、最近忙しかったから、このやりとりが凄く楽しい。

あー、前は結構自由な生活だったな、私。

「変わったこと？んあー…特にな…、…あ。…ないこともない、かも…」

一瞬、私は自分の目を疑った。

というか、手でこすってしまっ。

何故なら、シンデレラが、顔を少し赤く染めているからだ。

……あれ、錯覚かな。

幻想が見える。

疲れてるのかも、私。

「しんでれら？」

「……っえ、あ…な、なんでもないなんでもない！き、気にすんなって、かは、かははっ、」

笑い声にいつもの覇気がなくなっている。

とまどいすぎでしょ、シンデレラ。

それじゃあ、誰にだって、何か変化があったんだってばれるよ。

「どうかしたの？何があったの？友達として、教えてくれてもいいと思うんだけど」

「……こんなこと、ソーネの言うことじゃねーんだけど、さ。聞い

てくれるか？」

「聞く。シンデレラが困ってるなら、何でも聞く。それで解決してあげる」

ぼん、とない胸を叩いてみせると、シンデレラがにかつと笑った。

「頼もしいな。…でも、困ってるとか、そーゆーんじゃないんだよ。…実はさ、」

「うんうん。何があったの？」

シンデレラは、一瞬目を泳がせてから、私を見つめて、こう言った。

「恋煩い、なんだ」

その後、私の悲鳴が聞こえたのは言うまでもない。

「もう一度、しっかり説明してくれる！？」

「ちよっ…、ソーネ、怖い怖い、ガハハ、」

「説明してくれる！？」

「…だからさー、」

頭をぼりぼりと掻きながら、シンデレラがはにかむ。

その頬は薄く赤に染まっでいて、それがまた、私を妙にいらだたせた。

「この前、あたしが市場に行ったときによお、なんか…ちっせえ坊主と女の子が、売り物を勝手に取って行こうとしていたんだ」

それは要するに、盗人だ。
そんなに小さな子供達が、泥棒をするなんて、信じたくなかった。
…この世界は、やっぱり怖い。

「あたし、それを止められなくってさ。…だって、まだこんなにちっせーんだぜ？」

シンデレラが手で大きさを示す。

それを見たところ、その子達はきつと、地球で言う小学一年生だ。
…やっぱり、こんなの間違ってる。

「…どうしていいか、わかんなかった。店のおっさんやおばさんも、苦労はしてるけど、一応食っていける。だけどさ、あいつらはきつと…毎日毎日、ひもじい思いして、悪いことだって知ってるのに泥棒して、それでもまだ腹が減って…。そんなの、止められっかよ」

私は、唇を噛み締めた。

シンデレラは、ぎゅつと拳を握りしめている。

だって、理不尽じゃないか。

毎日毎日、適当に暮らして、適当に遊んでいる貴族のオヤジ共は、裕福な生活を送っていて。

毎日毎日、ひもじい思いを噛み締めて、仕方なく泥棒をしている子供達が、いつまでもひもじい生活を送らなくてはいけないくて。

こんなの、おかしいよ。

そりゃ、泥棒は悪いことかもしれないけど。

だけど、毎日食っちゃ寝食っちゃ寝してる迷惑オヤジ共に比べたら、全然マシだ。

だって、子供達はみんな、賢明に生きている。

「あたしにはどうしようもできなかった。悔しくて悔しくて、危うく暴れ出しそうになった。…そんなときだよ。あの人が現れたのは」

あの人？

「あの人は、突然立ちすくんでるあたしの目の前に立ってさ、子供達から売り物を取り上げたんだ。あたしが、怒ってそれを取り返そうとしたら、あの人は、お店の品物を、盗もうとした量の倍くらい取ってさ、こう言っただ」

シンデレラが、そこでゆっくり息を吸う。

「 “ どれだけひどくても、どれだけ苦しくても、負けるな。もがけばいい”。…それで、あの人は、大金を払って、すっげえ量の食料を、坊主達にくれたんだ」

な、すげえだろ？

そう言っ得意げに笑うシンデレラを見て、私も笑った。

いい男だね。

それにシンデレラ、貴方も十分、いい女だ。

030・シンデレラの恋（後書き）

このネタ引きずるよ。

っていうか字数に合わせていたら恐ろしい程バランスが悪くなっ
たとゆーね。

???：隊長とソーネの悪戯なH a l l o w e e n

” H a p p y H a l l o w e e n ! ! ”

皆様こんばんは。

恋夢です。

下の絵は、白熊様からいただきました。

> i 3 3 8 3 2 — 4 2 9 6 <

どうですどうです？

かつこよくないですか!!!

私は惚れましたよもちろん。

なんだこいつ、ダーティのくせに…っ、ダーティのくせにいい！

！（照／／／

そんなこんなで、舞い上がって踊り狂って歌いまくって喜んだ恋夢が、白熊様へのささやかなお礼として、全力で書き上げた物語がこれです。

本当にささやかで申し訳ないのですが、では。

白熊様にたくさんの感謝と愛をこめて（返却はお断りですよ！）

“ T r i c k o r T r e a t ? ”

「たーいちょう！」

「…ソーネ？」

私の目の前に立っているのは、とてもにこやかな顔をしたソーネ

だった。

…何故ここに？

その顔が無駄に可愛くて、強く抱きしめたい衝動に襲われた。

「ソーネですよーっ、隊長ってば、私のこと忘れちゃったんですかー？」

「…っそんなことは、！」

そんなことはない。

明けても暮れてもソーネのことを考えている。

今頃何をしているのかとか、変な男に誑かされていないか、無事
でいるのか…いつも考えているのだ。

「いいんです。私はどーせ、影が薄いので」

「…影に薄いも濃いもないだろう」

ソーネが顔をぶいっつとそむける。

…これは…、拗ねてる？

その表情が恐ろしく可愛い。

…そういえば、今日のソーネは変わった出で立ちだな。

黒色の膝丈ドレスに、同じく黒い帽子。

そして、革のブーツ。

「ソーネ。…この格好は、なんだ？」

「これはですね、魔女なんです！」

魔女。

聞き慣れない言葉だ。

魔法士のことだろうか。

「マジヨ……」

「はい！そろそろ、地球ではハロウィンの時期だなあって思って……」

チキュー？

アロギン？

……何のことだ。

言っていることは意味不明だが、とにかく、理由があつてこの格好をしているということは分かった。

それにしても、奇抜な格好だ。

「アロギン、か。……楽しそうだな」

「ハロウィンですつ。あ、そうだそうだ。たいちよー、」

にやっと不敵に笑みをこぼすソーネ。

……な、何だ？

何を考えている？

冷や汗がたらりとたれるのを感じた。

「Trick or Treat？」

お菓子をくれないと、

悪戯しちやいますよ」

お菓子？悪戯？

意味が分からない。

どういうことだ。

「たいちよー、早くお菓子くださいよー」

「菓子など持っていない」

「えええっ。…じゃあ、悪戯、しちゃいますよ!」

何をするというのだ。

ソーネのことだから…風呂に入れ、とか?

それとも、掃除を手伝え、とかか?

私が頭をひねっていると、ソーネが私の頬に手をかけた。

……。

「……ソーネ?」

「はい」

「何を、している?」

「悪戯です」

どんどん迫ってきているソーネの顔。

その辺の女共とは違い、飾り気のないシンプルな顔立ち。

…これは、逃げるべきか?

でも、ソーネから迫ってきてくれるなんて…こんなチャンス二度
とない気がする。

……よし、逆らうのはやめにしよう。

「隊長」

「…何だ?」

しまった。

ぼーっとしすぎていたか。

私が慌ててソーネの瞳を見つめると、その目がゆらりと形を変えた。

……。

瞳だけではなく、輪郭、体型、全てがぐにやりと歪み、形を変えていく。

…そー、ね？

「たいちょ……、ダーティ」

「…おい、ソーネ？」

「ダーティ。起きろ。ダーティ」

「ソーネ！？ソーネ、おい、ソーネ！」

ソーネが、ぐにやぐにやと歪んで、徐々に、見覚えのある人間になつてく。

この顔、この体、この髪型。

ああ、こいつは…、ムノイだ。

「ダーティ！ダーティ、起きろつて！」

「……やあ、良い目覚めをどうも、ムノイ」

「目が怖いぞつ、ダーティ！早起きは基本だーつ、はははは！」

…笑い事ではない。

さっきのソーネが夢だったなど。

誰が信じられる。

いや、誰も信じない。

しかも、起きた瞬間に、ムノイ…だと！？

「…おいムノイ」

「んあ？どーしたダーティ」

「……特訓に付き合え」

「え？え？え？？ちよつ、ダーティなんで怒つてんの！？俺起こしただけじゃん！？むしろ感謝してくれよ、青春の醍醐味を教えてやったんだぜ！？なあ、ダーティ、ダーティ、ちよつ…、おいしい！」

…何がアロギンだ。

…何が悪戯だ。

だが、よく考えれば、あのまま夢を見続けていたら、ソートと…いろいろ出来たのだ。

…うん、やはりムノイを許す訳にはいかないな。

「…安心しろ、ムノイ。……特訓の地獄行き特急に乗らせてやるよ」
「おいしいiiiiiiii！」

f i n .

031：謎の男

「それで、その男の名前は？容姿は？服装は？？」

「ちょ、そんなに一気に質問されても困るって！」

焦るシンデレラ。

かーわいい。

…ああ、これが、好きな子をいじめたくなる男子の心境なのかな。

「えっと…名前は、聞けなかった。っつーか話しかけられなかったよ。…見惚れちゃってて、さ」

まるで見惚れたことが不本意であるかのように、シンデレラは眉をひそめる。

いやー、青春青春！

「それで、顔は？カッコイイの？」

「うーん…よく、分かんねえ。あたし、今まで男をそっぴう風に見たことないから。カッコイイとかかつこわるいとか、全然分かんねーんだよな」

これは顔には期待できそうにないな。

まあ、性格がいいだけで、十分点数は上がっている。

今のところイケメンテスト百点中六十点というところか。

「カッコイイかどうかはいいから、パーツとかの説明をお願いしま

すシンデレラ様！」

「えーっと……。髪は…、金色で、目は…蜂蜜みたいな色だったな、うん。体型は割と細身で、身長はあたしと変わらないくらい。肌は白かった。若い、と思う」

金色と蜂蜜みたいな色って…何が違うんだ。

細身で肌が白这件事情は、女々しいということかなー…。

身長がシンデレラと変わらない、ってことは結構ちびだろうな。

それに、シンデレラから見て若い…ということは、あたしよりも年下くらいなんだろう。

……うーん、男らしい容姿にも期待はできないぞ、これは。

「…それで、服装とかは？そんな大金を持ち歩くくらいなんだから、お金持ちっぽい？」

「お金持ちつつー感じじゃなかった。深く帽子を被ってて、小汚い色のコートに、破れてるズボン、それから泥で汚れたブーツを履いてた」

小汚い色のコート？破れてるズボン？泥で汚れたブーツ？

そんな格好をした野郎が、いとも簡単に大金を、小坊主達に手渡すものなのだろうか。

いや、もしかしたらその大金は、シンデレラの好きな人の全財産なのかもしれないけど。

そうだとしたら、とんでもないお節介だ。

「…謎ね」

「謎だろ？」

汚いなりで、大金をばいっと小坊主達にあげてしまう男。

……謎だ。

「ところで、ソーネは好きな人とか居るのか？」

興味津々、といった様子で私を見てくるシンデレラ。

「……ここでこうくるか。」

地球でもよくあることだけれど、女子というものは、恋をした瞬間に、周りまでもを巻き込むのだ。

『ねえ、アンタも好きな人居るんでしょ？教えてよ、ねえ、だってあたしも教えたじゃん』

居ませんから。

「居ないよ」

「ふーん、そっか。じゃ、あたしの方が大人だな！」

「……私は、“今は”居ないよって言ったの。初恋はとっくに過ぎ去ったよ」

「嘘だろー」

「嘘じゃないですうーっ」

私だって、初恋くらいはしてる。

……いや、苦い思い出だけどさ。

「……なあ、ソーネ」

「ん？」

「そっいえば、こんな時間だけど、大丈夫か？」

「……」

大丈夫じゃございません。

「ソーネ！だから、アンタって奴は、ホントに……！ホントにホントに、馬鹿が直らないんだから！」

いろいろと文章がおかしいですダディさん。
なんて言える立場じゃないよな。

ただいま、お説教中です。

「ダディさんにつけてり絞られている真つ最中。」

…うー、食欲が消え失せていく…。

まあ、怒られるのも仕方ないことだけだね。

だって、約束の時間から一時間は遅れた上に、食材を一個買い忘れてしまったのだ。

私がダイさんの立場だったとしても怒るわ。

「すいませんすいませんすいません!!」

「すいませんで許される問題じゃない……！……まったく、アンタ、次こんなことしたらただじゃおかenないわよ。今日のところは、夕食没収で勘弁してあげるわ」

「ありがとうございます」

…あ、今唐突に食欲が湧いてきたぞ。

お腹減った。

夕食没収とか……最悪だよ、本当に。

「ダディさんのこめかみは、まだびくびく動いている。相当怒ってるな。」

ここで反抗すると、余計怖いことになるだろう。

そう思い、私はすぐごと、自分の部屋に帰ることにした。

「ソーネ」

「はい？何ですかダディさん」

「誰が、帰っていいと言った？」

「……え、」

でも、反省しなくちゃいけないんじゃない？…。

ダディさんが、私の目の前で不敵に笑う。

私の額から、冷や汗が一筋流れた。

…嫌な、予感が。

「もちろん、ソーネには、夕食の支度やら後片付けやらを、普通の人の五倍は頑張って貰うわよ」

覚悟しなさい。

ダディさんの目がそう語っている。

今でもお腹が減って仕方がないのに。

これ以上働いたら、私はきつと、お腹が減りすぎて死んでしまう。

「ソーネ。アンタ、食い物が欲しいと言える立場じゃないの、よく分かってるでしょうねえ」

笑顔のダディさん。

でも、目が笑っていない。

め、目でものを語る女って怖い…。

「分かっています」

「なら、さつさと働きなさいっ」

「ほiiiiiii」

…仕方あるまい。

トップシークレットを使うしかないか。

私は、心の中でそう決めた。

「ソーネ、何ボーツとしてんのよ!？」

「すいませんでしたあ!」

032・阿呆王子のサンドウィッチ（前書き）

何だろっこのサブタイトル。

032：阿呆王子のサンドウィッチ

メイドの夜は早い。

そしてメイドの朝も早い。

だから私は、素早く脱走して素早く戻ってこなければならぬ。

ダディさんの大きないびきが聞こえてくる。

…よし、眠ったな。

念のための確認もかねて、ひょこつとダディさんのベッドを覗くと、幸せそうに眠っていた。

さあ、夜食を食べに行こう。

この城に居る私の知り合いは数える程しかない。

マリアさん、ダディさん、そして阿呆王子だ。

で、この中で食料を奪え…ごほん、失礼。

この中で食料をくれそうな人は、阿呆王子しかない。

そういうわけで、私は阿呆王子の部屋に向かっている。

「つたく、この城無駄に広いんだよねー。この面積の半分くらいでいいのに」

えーっと、王子の部屋はどこっけ。

あ、王宮だから最上階か。

あんな所まで階段は辛い。
できれば遠慮したいが。

「エレベーターが欲しい」

地球に帰りたい。

というか地球に帰ってエレベーターをこっちの世界に持ち帰りたい。

まあ、そんなことを考えても結局階段を上りますけどね！

今はメイド服を着ていないので、恐らくマリアさんとかに出くわしてもバレないだろう。

乞食かなんかに間違えられるんじゃないかな。

…あ、それはそれでお城を追い出されてしまう！

あたしが悶々と悩んでいると、誰かの足音が上の方から聞こえてきた。

だっ誰か来た！

どうするよ？どうする？？

私だつてことはバレないだろうけど、怪しすぎて追い出されるという可能性も捨てきれない！

…こうなったら、堂々と歩いてしまおう。

それが一番いい気がする。

というわけで、私は顔をあげてずんずんと歩き出した。
徐々に足音が近づいてくる。

あと少し…あと少しで…、ご対面…。

「……お、」

「…ひつ、」

うわあバレた！？バレた！？バレた！？
焦りまくる私。

でも、それをなるべく表情には出さないようにして。

「…ご苦労」

「…い、いーえ…っ」

何かが苦労なんだろう。

ってつかこの人誰！？

怖くて顔をあげられないんですけど。

「…あー…：…ではっ！」

「…っ、ひゃい！」

何だひゃいって何だひゃいって何だ！

…もう嫌だ…。

噛みまくりだろ私。

…：…うん、とにかく、この階段を上りきらなければ！

私がそう思い、ぱっと顔を上げた瞬間、下りてきた人と目があつた。

綺麗な少年だ…。

悔しいけど、私よりも肌が綺麗な。

それに細い。

男の人というよりは男の子という感じのあどけなさが残っている。

「…そういえば、」

「はい！な、なな何でしょう、かつ」

「この上には、王宮の人間しか居ませんが」

「……そう、ですか」

き、気づかれた!?

私、怪しくないです!

……ただ、夜食をちよつともらいに行くだけで、全然怪しくなんか……ないと思ってます。

「なら、良い。じゃあな」

「は、ははは、はい!」

……気づかれ、なかった……?

き、奇跡かこれは!

神様ありがとう!

リプルには感謝しないけども!

この調子で、王子の元を目指してれつつらー!

「で、僕の部屋に来たと、そういう訳か」

「そういうわけです王子。ということなので、食料を恵んでくださ
い!」

「ソーネ……それが、夜中に男の部屋に一人で来て言うことか?」

「私には王子しか希望がないんですってば、さっさとなんか持って
きてくださいよこのあほんだら」

「アホンタリヤ?何だそれは」

「気にしないでください」

どうせ説明しても分からないでしょう貴方阿呆だから。
無駄なことはしない主義なのです。

「…まあ良い。確かその辺りに、サンドウィッチがおいであつたはずだから、食べてもいいぞ」

「いただきまーすっ」

「……ソーネに羞恥というものはないのか」

「今はないっ。王子に使う必要がない！」

「はい傷ついた！僕は傷ついたぞ！」

サンドウィッチ…おいしい…！

何だろっこのちょうどいい甘さ。

ああ…おいしい……っ。

「……ソーネ」

「ふあい。ふあふふえふか」

「相談があるんだ」

「ふあ？」

相談？

阿呆王子が？

私に？

…なんだろう。

頭を良くしてくださいとかだつたら無理だな。

お金持ちになりたいとか？

…十分金持ちだわコルア。

だつて見てよこの部屋！

何で一面ピンクなの！？

どこのファンシー小娘だ貴様！

阿呆な王子は髪も部屋も全てがピンクなのであつた。

そして装飾品とかがきらきらしてるよ！

あの壺とか絶対高い！

高値で売れちゃうよ！

…いや、あんな趣味の悪い壺を買うような物好き居ないか。

「ふおうふあんっへなんへふふあ」

もぐもぐもぐ。

さっきのサンドウィッチが卵だったとすると、今度のこれは…ハムだな。

うー、地球の味を思い出すよ…おっかさん…っ。

「実は…、僕、シンデレラに恋をしているようなんだよ」

……。

私は、食べていたサンドウィッチをごくりと飲み干してから、大げさに咳をした。

…あー……耳の調子が悪いのかも。

うん、耳鼻科に行かなければな！

さて、王子の相談は何だっけ？

「王子、今なんと仰いました？」

「だから、僕はシンデレラに恋をしているん」

「あああああ”！？」

シンデレラに。

この王子が。

この粘着質王子が。

この粘着質阿呆王子が。

恋！？

「王子、生きてます？」

「…ソーネ、僕をなんだと思っているんだい？」

「阿呆だと」

「…失敬な！僕はね、この美貌と才能で世のあらゆる男子の嫉妬を
買い、あらゆる女性の、」

「黙れ阿呆王子」

「ごめんなさい」

032・阿呆王子のサンドウィッチ（後書き）

ああ。

ごめんよシンデレラ。

そしてソーネと王子の組み合わせが好きすぎる。

033：どきどきやズキズキ

シンデレラに。

この阿呆王子が。
恋。

…そりゃ、あり得なくはないよね。

シンデレラは可愛いし。

豪快だけどいい子だし。

でも。

シンデレラには、好きな人が居るのに。
惜しいね王子。

ちよつと遅かったな、うん。

「王子」

「ん？なんだ？」

「どんとまいんど」

「は？」

目を丸くする王子。

それを横目に、私はサンドウィッチに手を出した。
ふむー、上手い。

サンドウィッチは万国共通ですね。

というかコレはあれなのでは。

日本で使われている名前は通用しないとか？

あ、それならどんとまいんども通用するはずか。

…異世界って意味が分からない。

「なあソーネ。それより、僕の恋の始まりを聞きたくないか」

「聞きたくないです」

「……メイドにサンドウィッチを作ってもらおうと思っていたのに
なあ、残念だ」

「聞きましょう」

それでこそソーネだ。

と、王子はニヤリと笑った。

「じゃあ、僕の恋の始まりを語ろうか。

…ちよつとソーネ、サンドウィッチこぼすのはやめてくれないか。
ほら、またぼろぼろこぼれてるから！全くソーネはだらしないな
あ。え？僕には言われたくない？どういうことだい？？

いや、そんなことはどうでもいいんだ、うん。

ソーネも知ってる通り、僕とシンデレラは前に一度会ったことがある
だろう？え？覚えてない？…ソーネ、とぼけてないか。

あーもう、これ以上話をそらさないでくれるかなソーネ。とにかく、
あのとき僕は、シンデレラを好きになってはいなかったんだよ。
そりゃ、少しは気になっていたけどね。

僕が、シンデレラに恋に落ちたのは、僕が街へ出たときだった。

僕だって街に出るんだよ。もちろん、馬車に乗っての見物だけだね。
それで、そのときに、彼女を見たんだ。

綺麗だった。

初めて、自分以外の人を美しいと感じた。それくらい、あのとき

のシンデレラは綺麗だったんだ。

え？シンデレラはそのとき何をしていたのか？ソーネは僕の話に水を差すのが好きだな、うん。

シンデレラはそのとき、窓ふきをしていたよ。今でも僕の目には、はつきりとあのときの景色が浮かぶんだ。

ぴかぴかの窓。その窓の向こう側に居る銀髪の少女。きらりと光ったエメラルドの瞳。そして、極上の笑み。

なあ、ソーネ。

胸が、ズキズキと痛いんだよ。

初めてなんだ、こんな気持ち」

王子がぼけーっと窓の外を見ている。

どうせ妄想にでも耽っているのだろう。

全く、これだから恋する男というやつはいけ好かないのだ。

「分かっただろう、ソーネ。シンデレラがどれだけ美しいかということが」

「よく分かりました、王子が恋をしたことによって更に阿呆にいらっていることが」

私の皮肉にも、王子は答えない。

それどころか、にやにやと私を眺めている。

な……なあんか嫌な感じ。

「ソーネは、ヤキモチを妬いているのだろうか？」

「は……、！？」

誰が、誰が、誰に、ヤキモチを……！？

顔がカアアツと熱くなるのを感じた。

「……王子」

「なんだい、ソーネ」

にやにやと、いやらしい目つきで私を眺めてくる王子。
その王子を思いっきり睨む。

…ナメんな。

私は、阿呆に惚れるほど馬鹿じゃないんだ。

「私、帰ります」

「え？帰るの？何、怒ったのか、ソーネ？」

「別に！！！」

がん、と派手な音をたてて扉を閉める。

あー……。

ムシャクシャする！！

隊長へ。

はいけい。

こんにちは、隊長。

私は元気でふ。

ところで、あのあほ王子が変こいをしました。
ほんとうにあほですよね。

しかもそのおあいてはしんでれですよ。

みのほどちがいにもほどがあるわってかんじですよれ。
まったく、あほはどころんでもあほなんだから！

隊長もすてきな変をしてくだしいね。

おうえんしていますよ。

私はですね、変をしたいんですけど、であいがないですよ。
かなしいですね。

それでは。

いつも元きなソーネよい。

ついき。

そういえば、フライパンありがとうございました。

またそのうちあそびにゆきます。

そのときはしんでれらとむのりさんもさそってばーちーしまそ
うね。

では。

隊長もお元気で。

「そ・お・ね！」

「ふあふあひゃい!？」

「いい加減置きなさいっつってんでしょーが! ったく、いつまで寝
ぼけてんのよアンタは!」

あれ。

あれ……いつの間に、朝?

うーあー、やだな、私ってば、隊長への手紙書きながら眠っ
ちゃったのか。

おお、朝日が目に染みる……っ。

「おはようございま、す、ダディさん」

「アンタは“おそよう”だわよ、ホントにだらしないわね。んで

「？ちゃあんと反省、したんでしょうね？」

「ももも、もちろんです！」

そのとき、ちょうど私のお腹がぐーっと鳴った。

うわ。

サンドウィッチをもう一個食べておけば良かった…。

お腹を押さえて座り込むと、ダディさんが心配そうにのぞき込んでくる。

「ソーネ。アンタ腹減ってんの？」

「は、はい」

「…仕方ないから、さっきの朝食の残り、あげるわよ。普通なら、遅刻した罰として朝食抜きなんだからね。感謝しなさいよ」

「ははははい！ありがとうございます！」

恋とか。

そういうことはまだよく分からない。

地球では初恋とかを経験して、キスまではステップを踏んで。

それでも、シンデレラや王子が言うような、「ときどき」や「ズキズキ」にはめぐり逢ったことがない。

隊長は私のことを好いてくれているらしくて、それは少し嬉しかったりもするんだけど、それでも、ときどきとは少し違う。

ズキズキとした痛みも来ない。

だけど私は、私らしい恋を経験したいから。

だから、ゆっくりと、自分の足で進んでいこうと思う。

033：ときどきやズキズキ（後書き）

ソーネは恋愛ということを学んだ。

チャラリラー #

ソーネはレベルが1アップした。

チャラリラー #

つてふざけてる場合じゃないんです。

はい。

ええ。

来ました、テスト。

頑張ります。

ということなので、来週の更新は恐らく不可能です…。

ごめんなさい！

毎度毎度のことなんですけど、やっぱり申し訳ないです。。

私なんかの小説を待っていてくれる人が居るのに！！

それでも、中学生にとっては勉強が一番。

泣く泣く机に向かいます（涙涙涙）

では。

また再来週に！！

034：彼と彼女とそれから侍女（前書き）

なんて縁起の悪い。

と思ったら間違えてた。

034：彼と彼女とそれから侍女

王子がシンデレラに恋をして。
シンデレラは謎の男に恋をして。
それでも世界は廻っています。

そんなくだらない歌を口ずさみながら、私は街を歩いていた。
昨日は念願の給料日だったのである！万歳！
というわけで、今日は私はショッピングをしに街へ出かけているのだ。

「何を買おうっかなあー」

服。

でも、メイド服で十分だし。

ちなみに、私は今もメイド服で街を歩いている。

対して目立つてはいない、と思う。

家具。

雑貨洋品。

非常用食料。

いっそケーキでも食べて、この金をぱーっと使ってしまうのか。

突然、甲高い音が聞こえた。

それはまるで、私が小さい頃愛用していたラッパのような。

な……何！？

音の下方向へ目をやると、真っ赤な衣装を着た兵隊さんが、ぴしっと立っていた。

そして、その兵隊さんの後ろには、おとぎ話に登場しそうな馬車。
本物なの！？…って、本物か。
兵隊さんが高らかな声で叫ぶ。

「ここにおられるは、ウォールナト王国第一王子、リグト＝ウォールナト様である！道を開けい！」

どこかで聞いたことのあるような名前だ。
そう思い考えていると、一人の人物に思い当たった。

あんの阿呆王子めが。

「その貧しい侍女よ、どけ！」

「……え、あ、私？」

「お前以外に誰がいる」

いや、結構居ると思うけど。

そんな反論は心の内に修めておき、私は兵隊さんに向き直った。

「ところで、何故王子がここにいらしているのです？」

「うむ。リグト様が気に入った姫を、王宮に迎えるためだ」

何故か偉そうに言う兵隊さん。

私は、その兵隊さんの言っている意味が理解できなかった。

王子が気に入った？

姫？

王宮に迎える？

全てのワードが頭の中で繋がると、私はものすごい勢いで、シンデレラの家へと駆け出した。

シンデレラが、阿呆王子の嫁になってしまう！！

「お、おいこら、貧しい侍女！待ちなさい、おい！」

「待てと言われて待つ者居ない！教えてくれてありがと、兵隊さん！」

スカートが翻る。

酒飲みのおヤジたちがおよつとどよめく。

うるさい黙れ飲んだくれ共め！

シンデレラを王子の嫁にしようなんて、例えお天道様が許そうが、このソーネ様が許さないんだから！

「シンデレーラー！！」

「えっ、お、あ、ソーネ！なんだ、びっくりした！。どうした？何か用か？」

相変わらず男前なシンデレラに、ひとまず安心。

よかった、阿呆王子の魔の手はここまで伸びてはいなかった。

「逃げて！」

「どうしたソーネ、ガハハハッ！」

「とにかく逃げよう！」

説明なんかしている暇はない！

私は、シンデレラの家に文字通り転がり込み、シンデレラの腕をぎゅっと引っ張った。

「ソーネ、なんで逃げるんだ？」

「シンデレラが無理矢理結婚させられちゃうから！」

「…なんだそりゃー！ガハハハッ」

「笑い事じゃないって！ほら、早く裏口から逃げて！あ、ていうか変装しよう、そうしよう！」

王子がこの家にたどり着くまでには、せいぜいあと数十分。

その間に、シンデレラを変装させて、裏口から逃げ出してもらわないと。

「シンデレラ、男物のズボンとかある？」

「んー…っと、確か親父の服があったけど、」

「それだ！」

シンデレラの父上のズボンとYシャツをクローゼットの中からあさり出す。

無難なデザインと無難な色を見つけて、シンデレラに着てもらった。

なんだかシンデレラは楽しそうだ。

さて、シンデレラの綺麗な髪と目を隠すにはどうすればいいのだろうか。

元の世界だと、サングラスを使うよねー…。

それから、髪を隠すには…。

……あ。

帽子だ。

帽子を使えばいい。

目深に被ればバレないだろう。

「シンデレラっ、次は帽子！帽子を深く着用して、髪を帽子の中に

入れて！…できた？よし、そしたら裏口から逃げて！森の辺りまで行ったら、そこではとぼりが冷めるまで待ってて。後で様子見に行くから。この家は私に任せなさい。あと、シンデレラのドレス借りるからね」

「…あー…、つまり、あたしはこの帽子を被って森に行けばいいんだな？」

「そういうこと。だかえど、走っちゃ駄目よ。あくまで自然に！」
「ん、分かった。任せとけっ、ガハハハッ」

シンデレラが裏口から出て行ったのを確認して、私はシンデレラの部屋に入った。

そのクローゼットから、シンデレラのドレスを取り出す。
そして、その上にコートを羽織り、帽子を深く被った。

…よし。

これで、少しは時間を稼げるはず。

「王子！シンデレラが居ません！」

「なに！？何故だ？シンデレラは僕が迎えに来るのを待ち望んでいるはずなのに！」

「……お言葉を返すようですが、王子。シンデレラは、逃げたのではないでしょうか」

「…何で？」

不思議そうな顔をする王子を見て、兵士はこっそりため息をついた。

この人には、常識というものがない。

「実は、先ほど、この家から大あわてで走り出し、コートと帽子を被った女を見かけたという情報が入ったのです。この時期にコートはまだ早いです。ということは、」

「なるほど！さすがシンデレラだ！僕とおいかけっこがしたいのだね！望むところだ！」

「……はあ、そうかもしれませんね」

兵士はうんざりする。

全く、この阿呆王子が！

「では、早速シンデレラを捕まえよう！うん、そうしよう」

「はっ。仰せの通りに」

このとき兵士は、大通りで見かけた、貧しい侍女のことが気になったのだが、そのことは王子には言わなかった。

そのことを悔やむのは、もう少し後のこと。

035・年下の男に捕らわれて（前書き）

あー。

サブタイトルとかもう馬路ぐつでもいいわ

035：年下の男に捕らわれて

この時期には暑苦しいコートを引きずり、街を走る。
走った方が目立つ。

目立つたら、本物のシンデレラをカモフラージュできる。
だけど、いくら何でもこれは暑い…。

人通りの少ない路地裏まで走って、そこでようやく私は足を止めた。

せえぜえはあはあと肩で息をする。

ふいー、こんなに走ったのは体育祭以来だ。

「体力落ちたー」

それでも、日本に居た頃は一日中お掃除していても全然兵器だったのだ。

それが、たった少しのランニングで、ここまで疲れてしまうとは。

…って、待てよ。

そういえば、日本に居た頃も、体育は苦手だったような。

……体力が落ちたんじゃない。

…元から、私には体力というものが装備されていないのだった。

「うむ、納得」

さて、納得できたところで。

れつつらごー！

と、私が片足をあげたそのときだった。

「貴方が、アッシズⅡレイシャンジ嬢ですね」

まだ声変わりもししていないような、がきんちよの声が聞こえた。
私が身を固くして振り向くと、そこには無表情の青年が居た。

……ん？どつかで見たことあるような。
どこだったつけ。

んー……思い出せないや。

それよりも。

私が、シンデレラだと間違えられている？

もしか、王子の手下？

……これは、まずい。

ここで王子に捕まったら、本物のシンデレラが逃げ切ることができないじゃないか。

何としてでも、誤魔化さなければ。

「……失礼するわよ！」

私は、青年の真っ正面に立ち、急所をがつんと蹴った。

うん、乙女としては言い難い場所だけど、つまりその、股間です。
りますね、はい。

「ウツ！？」

うめき声をあげる青年の胸をどんと突き、青年がよろけた隙に逃

げ出す私。

今じゃー！

「おいこら、アッシズ＝レイシャンジ嬢、待…」

「待てと言われて待つ者居ない！」

今こそ見せつけるが良い、私は短距離走だけは得意なのだからー！
…って、あれ、自信なくなってきた。

私、体力がないのではなくて、運動神経そのものがなかったような気が……。

……うん、気のせい気のせい。

そんなことをうだうだと考えながら走っていたせいか、途中ですっころんだ。

痛い。

地味に痛い。

ひざがすり切れていませんかこれ。

あーもう、泣きたい。

でもここで止まっではいられない！

ということ、走り出そうとした私だったのだが、…捕まったよ。
後ろから凄い勢いで追いかけてきた青年に捕まったよ。
足、速すぎるだろう。

「…っ、っ、お、お前…！」

血走った目で私を見つめる青年。

なんかもう殺人鬼にしか見えませんか。

すっころんで起きあがろうとした、微妙な立ち方の私の肩に、青年はぐいっとな手をかけた。

転ぶフラグが立った気がする。

そう思ったのもつかの間、私はこれまたもののみごとにするんだ。

青年と一緒に。

しかも、私が青年の上に乗る形で。

「ぐえっ」

「重いと言ったらクロス！」

乙女にそんな酷なこと、言わないよね？

ぐったりと倒れている青年の背中を思いつきり踏んで、駆け出す私。

今日一日、それだけでも逃げ切ることができたなら…！

「さよなら青年さーん！」

「んなっ！？あ、アツシズⅡレイシャンジ嬢っ」

それにしても、青年に初めて会ったときに感じたあの違和感。あれは一体、何だったんだろう？

うん。

今では愚かだったと思ってるよ。

さすがに、男女の壁は高かったね。

そんなことにも気づかなかったなんて、十分前の私は馬鹿みたいだよ。

「“んで”！？あんたはアツシズⅡレイシャンジ嬢なんですよね！？」

「違いますけど!？」

「喧嘩売ってんのか小娘!」

「売っていますとも! だいたい貴方に小娘言われる筋合いないっつーの!」

絶対私の方が年上だし!

この手が“自由だったならば”今にでも自慢の鉄拳を奮っているところだわ!

私の手は今、縄で縛り付けられている。

それどころじゃない。

足も、ひざも、それからウエストのあたりまで、きつく縄で縛られている。

青年によつて、だ。

ななな、何も、胸まで縛ることないじゃんね!?

いくら私だつて、縄抜けの技とか知らないし!

…いや、もし縛られているのが手だけだったらやっていたかもしれないけど。

でも、でも、乙女の胸を縄でぎゅんっぎゅんに縛るとか……っ。

サイテー!

「小娘は小娘でしょうが。どう見ても俺より年下のくせに小生意気な、」

「私、十八歳ですけど」

「……ナニ?」

「私、十八歳ですけど」

もう一度繰り返すと、サッと青年の顔が青ざめた。
どうやら、私よりも年下だったようだ。

ザマアミヤガレ。

「君は何歳なのかな？」

思いつきり侮辱しながら訪ねると、青年はきつとこちらを睨んだ。
へっへーんだ、そんなの痛くもかゆくもないわ。

「俺は……、……十六だ」

「ふーん。……餓鬼」

「つだ、誰が餓鬼だ、誰が！……だいたい、お前は俺に縛られてるんだからな！？」

「やつだー、何を始めるつもりですかあー？変態いーっ」

「黙れ黙れ、黙れえええ！」

さて。

どうやってこの縄を解いて貰おうか。

私は、余裕な笑みを顔に貼り付けて、じつくりと考え出した。

036：金色のアイツ（前書き）

サブタイトル見てアイツがどいつか分かった人はうちの常連さん
ですね

036：金色のアイツ

「いい加減、この縄を解いてくれない？」
「まだだ」

いつの間にか、敬語が消えてなくなっていた。
青年は、私の前に座り込んで何かを考えている。
あ、そういえばこいつの名前知らないや。

「それじゃあさ、名前教えてよ」

「……サム」

「…sonだけ？」

「今はこれしか教えられない。お前は？」

お前って。

年上に向かってお前って。

しかもサムとか、明らかに偽名じゃねえか。

と、つつこみどころはたくさんあるが、とりあえず置いておいて。

「私は、爽田絵衣。サワダがファミリーネーム。愛称はソーネ。だからソーネって呼んでね」

年上らしく微笑むと、サムは戸惑ったように首をかしげた。

「俺を、そんなに信用していいのか」

「別に、信用した訳じゃないけど、親から授かった名前を隠そうと

するまで疑ってもいないし」

ね、とサムに言う。

すると、サムは何故か顔を赤くした。

な、何でー？

「…そ、そうか。そうだよ、な」

「うん。んで…、この縄をさっさとほどいてくれない？」

「それは無理だ！」

そろそろいいかなと思ったんだけどな。

敵は意外と手強い。

…仕方あるまい。

シンデレラのためだ。

うん、そう。

女の魅力とやらを最大限に使ってやろっじゃないか、うん。

「サ～ム～くん！」

語尾にハートマークとかが付きそうな勢いで話しかけてみる。

即座に蒼くなるサムの顔。

……な、何故だ……。

「どうしたソーネ、気持ち悪いぞ」

「はいはい、わるうござんした」

どうせ私は可愛くないですよーだ。

女の魅力とやらも備わってないしな！

…あ、虚しい。

さてと。

私に女の魅力がないやらうんたらは置いておこう。
女の魅力が使えないならば、残る手段はただ一つ。

強行突破。

「サム、私耳がかゆい！」

「はあ？」

「かゆい！ かゆいかゆいかゆーい！ サムが私を縛ってんだから、サムが私の耳をかきなさいよ」

「何でそうなるんだよ！」

なんだなんだ、不満なのか？

と、目で訴えかければ、サムはものすごく嫌そうな顔をした。
乙女の耳に触らしてやるつつってんだから、さっさと触れよ！

「ほら、サム。もうちょっと手をのばして、さあ、私の耳に！」

「どこの酔っぱらいだ」

とか言いつつ、サムがおそろおそろ私の耳に手をのばしてくる。
よし、あと五十センチ。

三十センチ、十センチ……あと、すこし。

そこで、サムがしゃがむ。

…っしやあ来た！

ここで私の得意技の足蹴りを……って、

出来ない！

そっいえば私縄で縛られてた！

「何回でも。サムが私を、助けてくれるまで」
「そういうわけにはいかないだろ」

そういえば。

なんでサムは、私を助けてくれないんだろう。

最初は、ただの意地だと思っていたけれど、どうやらそれは違ってみたいだ。

もしかして、サムもシンデレラのことが好き…とか？

それで、シンデレラを手に入れたくて、私から情報を聞きだそうとしている？

「サム」

「んだよ」

「アンタ、シンデレラのこと好きなんですよ」

「……っはあ??」

目が点になるサム。

おーい、そこそ美しい顔が台無しですよー。

サムの髪は綺麗な金色。

瞳は、髪の色よりも深い金色。

何て言うか…あ、そうだ蜂蜜みたいな色。

顔は、男のくせに可愛らしく整っている。

まだまだ餓鬼っぽいけど、将来が楽しみだ。

「だって、そうでもなくちゃ、私をここまでする必要がないじゃない」
「い」

「あー……。そうだな、まあ。でも、俺はアッシズ＝レイシャンジ嬢に恋をしてる訳じゃねえよ」

「そうなの？じゃあ何で、私を助けてくれないのさ」

「簡単に言えば人助け。もう少し詳しく言っと、身内の恥を抹消させるため」

「は……？」

今度は私の目が丸くなる番だった。

サムが、喉の奥でくくつと笑う。

…笑顔は、なかなか可愛い。

そのとき、間抜けな飛行音が聞こえた。

しいて文字にするなら、「びゅーん」とでも表すような。

私は、…とても、嫌な予感がした。

「な、なんだ？」

サムがきょどきょどと辺りを見回す。

そのとき、私の目に飛び込んできたモノがある。

私が路地から見上げた空には、“金色”の物体が、飛んでいた。というか、こちらに向かって落下…いや、あれは完全に、突撃しようとしていた。

「……金の雑巾だ……」

「え？なんて言った、ソーネ？」

「金の雑巾だ。金の雑巾だ。金の雑巾だ」

「え？」

ねえ。

どうすればいいって言うの。

036：金色のアイツ（後書き）

最近コメディ重視しすぎて意味が分からなくなってきました。

あ、そうだ。

えっとですね、異世界大掃除？、？と続いたのですが。

正直言って……。

私、駄目なんです。

物語を切るタイミングが全然分からなくて。

そのせいか、？と？を分ける辺りで、

「分ける意味ないかも」

と一人思ったりもしまして。

そういうことなので！

いつそくつつけちゃおうかなと！

嫌だー、って人は一言言ってください。

作者の勝手な都合です。

「？」が完結したらくつつける予定です。

それから、先週は予約掲載の日にちを間違えてしまったようで。
申し訳ありませんでした！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7313w/>

異世界大掃除？

2011年12月16日18時56分発行